

「紋切り型との闘い」—ドゥルーズ思想における人間形成論

松枝 拓生

1. 本研究の目的と主題

本研究は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925 - 1995) の思想に内的な人間形成論を明らかにし、その現代的意義を明らかにすることを試みる。ドゥルーズは、人の認識を規定する表象や紋切り型の問題を批判的に診断した。ここで問題の俎上に載せられる紋切り型とは、世間に流布する常套句と化した中身の伴わない表現や、常套的な知覚や認識、思考の枠組みのことである。ドゥルーズは紋切り型の問題の射程として、紋切り型の表現や認識枠組みを人々の間に流布させる一方で、それらとは別様の表現や枠組みを用いることを困難にしてゆくような力学の強固さについて批判的に検討している。そこから、その思想は紋切り型と決別することのできない人間の存在条件にも切り込んでいる。こうしたことから、ドゥルーズの思想には、紋切り型に囚われることを人間にとっての不可避の条件として認めた上で、それでもなお紋切り型に抗おうとする「紋切り型との闘い」の思想が通底している。本研究は、ドゥルーズの思想におけるこの主題の展開について論じることで、紋切り型への囚われが教育と人間形成の理念を瓦解させつつある現代において、ドゥルーズの思想がいかなる教育と人間形成の射程を示しうるかという問いに取り組む。

2. 本研究の構成

本研究は序章、三部構成をとる7つの章、そして終章によって構成される。

序章では、本研究における問題の所在について論じたあと、問題に応答するための方法論と先行研究に対する立ち位置を示し、最後に本研究の構成について論じる。

第一部では、先行研究における紋切り型のドゥルーズ像によって覆い隠されてきた、ドゥルーズ思想における紋切り型批判の射程を明らかにし (第1章)、ドゥルーズの論じる学習概念が紋切り型からの逸脱を志向するものであることを示すことで (第2章)、ドゥルーズ思想それ自体が紋切り型との闘いにあること、またその人間形成論が紋切り型批判と内在的な関係にあることを確認する。

第1章では、アラン・バディウやスラヴォイ・ジジエクらの提示するエリート主義的ドゥルーズ像を取り上げ、その受容傾向がドゥルーズ思想に内在的な社会現実への関心を見えにくくさせてきた事情を明らかにする。バディウらの提示する読解は、社会現実への関心を示さない象牙の塔の哲学者というドゥルーズ像を形成してきた。こうした紋切り型のドゥルーズ像においては、ドゥルーズの議論から距離を取ろうとする言動は主観的な議論嫌悪として理解される。ところが、それは実際には主観的嗜好の問題ではなく、ドゥルーズの紋

切り型批判の観点に由来するものである。ドゥルーズの社会批判の姿勢は、紋切り型のものとなったドゥルーズ像によって覆い隠されてきたのである。ドゥルーズは自らの生きた時代状況を紋切り型の流布する時代として批判的に診断しており、哲学の使命を、紋切り型に囚われた世間や、既存の認識枠組みが再生産されてゆく趨勢への抵抗に見いだしている。そのような立場ゆえに、ドゥルーズは教師による生徒への知識教授という一般的な教育形態についても、紋切り型の再生産の営みと捉え、批判的に言及するのである。

それでは、ドゥルーズは教育や人間形成の営みについて肯定的なパースペクティブをもたないのか。このような問いに応答するのが、第2章である。第2章では、ドゥルーズが『プルーストとシーニュ』で展開する「学習」概念の含意と射程について明らかにする。同著で議論される学習は、世界を構成している「徴候」の数々を「解釈」することによって生じるプロセスである。一方で、ドゥルーズはある時期から「解釈」批判の立場を鮮明にしており、立場を転向させたようにも見える。同章が明らかにするのは、矛盾するようにも見える二つの議論がともに、支配的な意味作用体系や既成の秩序（紋切り型を生み出す力学）に対する批判的立場を共有しているということである。こうした立場は、彼の「横断線」の概念においても示されている。ドゥルーズが志向する学習のプロセスは、紋切り型とそれを支える体系を宙吊りにしつつ逸脱するような横断的な経験なのである。

第二部では、第一部で明らかにされた紋切り型批判の視角と学習概念の志向（紋切り型からの逸脱に見出される人間形成の可能性）が、ドゥルーズの著『差異と反復』で展開される「超越論的经验論」の方法と思想に結実していることを示す。ドゥルーズ自身の思想彫琢のプロセスが紋切り型との闘いの様相を帯びていること（第3章）、そして「愚かさ」概念に、紋切り型に囚われる自らの姿を批判的に捉えられるようになるという人間形成の思想が見いだされること（第4章）を論じる。

第3章では、ドゥルーズのカント批判について検討し、カントの乗り越えを試みる中でドゥルーズ思想体系が彫琢された経緯を明らかにする。ドゥルーズは哲学の営みを、誰しも依拠せざるを得ない既存の言説（哲学史）と対峙し、それを乗り越えようとする営みだと捉えている。ドゥルーズの思想は、このような営みの先行者カントとの対峙によって、自らもカント思想に依拠しながらその限界を乗り越えようとするのである。そうした試みを通じて、ドゥルーズは「実在的经验」について論じるための理論枠組みを構築している。

第4章では、ドゥルーズの「愚かさ」概念を検討する。思考を自然的な能力とみなす「思考のイメージ」に対して、ドゥルーズは思考を本源的に混迷したもの、強制されなければ開始されないものと捉える。その立場を代表するのが、思考に内的な構造として分節化される「愚かさ」の概念である。ところでドゥルーズの筆致において、愚かさは一方で侮蔑的な形象として批判的に言及され、他方で思考の開始にとって構成的な契機を担うものとして肯定的に位置づけられるという両義性をもつ。先行研究においてときに排他的な関係として理解されるこの両義性は、実のところ愚かさ概念を構成する不可分な要素である。愚かさは、自己のうちにある愚かさに恥辱を覚えることができるようになるという、一種の成熟の契

機に関わる概念であり、ドゥルーズが『差異と反復』で論じている実在的経験は、このような成熟のプロセスに関与するものなのである。

第三部では、ドゥルーズ芸術論を検討する。紋切り型に対する批判的立場をとるドゥルーズは、紋切り型の全面的な排除を志向するのか。これは、われわれが現実の生において実際に紋切り型と隔絶された境地を構想しうるのかというアクチュアルな問いにかかわる問題である。芸術の制作と受容は紋切り型表現と密接な領域であり、上記の問いに対するドゥルーズの立場もまた、その芸術論によく表明されている。

第5章では、画家フランシス・ベーコン論を扱う。ベーコンはさまざまな手法によって絵画を見る観衆や自らの中にある紋切り型に抗うが、紋切り型と無縁な領域を構想することはない。例えばドゥルーズがベーコンの実践に見出し評価する「ダイアグラム」の概念は、あくまで具象的な表現を出発点としつつ、それを局所的に崩壊させることで紋切り型から逸脱することを目指すものである。このような点にベーコンの画家としての特異性を認め評価するところに明らかのように、ドゥルーズはあくまで紋切り型が流布するさなかにおける闘いに軸足を置いている。

第6章および第7章では、ドゥルーズの映画論を扱う。第6章では、映画が表現するとされる、倫理的主題としての「信の転換」について検討する。映画論で論じられる、映画における「感覚運動図式の断絶」という出来事は、それまで無自覚に前提としていた枠組みに対する不信というニヒリズムの問題を提起している。それは他方で、無自覚な前提（自らが囚われている紋切り型）を批判的に直視できるようになるという意味で、ニーチェの道徳的真理批判の思想を継承するドゥルーズにとって肯定的な意義をも持つのである。そしてここには、視覚に関与する芸術である映画という主題と相まって、「見ることの学習」と主題化されうる思想が存在しているのである。

第7章では、第6章で明らかにしたことを引き継ぐ形で、映画論で論じられる紋切り型に関連する諸主題について検討する。ドゥルーズは、映画が、我々の日常がいかに紋切り型に囚われているのかを批判的に思考してきた実践であるという視点を提示している。例えば、「純粹に光学的音声的な状況」という映画の示す特権的な瞬間において、映画が画面に映し出すのは紋切り型にまみれた我々の日常、すなわち「日常の凡庸さ」である。同章ではまた、こうしたドゥルーズの紋切り型批判の視点が、プリーモ・レーヴィの「人間であることの恥辱」から引き出される倫理的な含意や、ドゥルーズの思考概念とも接続するものであることを論じる。

これら各章の探求をふまえて、終章ではドゥルーズ思想がいかに紋切り型の問題への関心をめぐって彫琢されているか、各章を振り返りつつ明らかにした上で、ドゥルーズ思想に内的な人間形成論の特徴と現代的な意義を明らかにすることを試みる。そこでは、各章で明らかになった諸概念の提起する射程と内的な連関を確認することで、ドゥルーズの思想が自己への「恥辱」の感覚を伴って喚起されるような「脱欺瞞」の人間形成のプロセスを展望するものであることが示される。これは、紋切り型の克服を展望するものではない。しかし、

だからといってよりよい生き方の構想を諦めるニヒリズムでもない。ドゥルーズの思想は、人間が紋切り型（紋切り型の表現や、その背後にある常套的な知覚や認識、思考の枠組み）を脱却できないことを見据えている。ドゥルーズの思想が示しているのは、だからこそ紋切り型との闘いが必要だということである。我々は紋切り型と無縁な世界を構想することはできないが、自らが紋切り型に無自覚に囚われていることを直視し、批判的に捉えることはできる。この無自覚な囚われの状態からの脱出にこそ、ドゥルーズの思想の人間形成論としての射程を見いだすことができるのである。そしてこの射程は、紋切り型への囚われという人間の条件がますます顕在化している現代の時代状況において、人間形成の可能性を語り直す上での有効な展望を示している。